

修士論文（要旨）

2026 年 1 月

中国における留守児童のレジリエンスに関する研究
—映画鑑賞と軽運動の比較—

指導 山口 創 教授

国際学術研究科

国際学術専攻

心理学実践研究学位プログラム

ポジティブ心理分野

224J2056

倪 旭

Master's Thesis (Abstract)

January 2026

Resilience among Left-Behind Children in Rural China:
A Comparative Study of Film Viewing and Light Exercise Interventions

Ni Xu

224J2056

Master of Arts Program in Positive Psychology

Master's Program in International Studies

International Graduate School of Advanced Studies

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Hajime Yamaguchi

目次

第1章 序章	1
1.1 問題の背景と課題	1
1.2 レジリエンスの理論的枠組み（子どもとの関連）	2
1.3 映画鑑賞による心理的介入の可能性	3
1.4 軽運動による心理的介入の可能性	3
1.5 留守児童とレジリエンス研究の動向	4
1.6 心理的介入の先行研究	5
1.7 本研究の目的と意義	6
1.8 本研究の位置づけと研究課題	7
第2章 研究方法	8
2.1 対象と同意取得手続き	8
2.2 留守児童の定義と判定方法	9
2.3 群分けと介入内容	10
2.4 映画および運動プログラムの内容	11
2.5 測定項目および使用尺度	12
2.6 データ収集と分析方法	13
第3章 結果	14
3.1 記述統計および介入前後の得点変化	14
3.2 群間比較（映画群・運動群／留守児童・非留守児童）	17
3.3 共感性水準による介入効果の差	18
3.3 感情アンケート・自由記述の内容分析	18
3.4 教員による行動観察の所見	19
第4章 考察	19
4.1 主要結果の整理	19
4.2 映画介入が心理的变化をもたらした要因	20
4.3 年齢差の可能性	20
4.4 軽運動介入の改善効果の解釈	21
4.5 留守児童と非留守児童の比較に関する考察	21
4.6 映画鑑賞介入と軽運動介入の効果差	21
4.7 本研究の学術的貢献	21
4.8 本研究の限界と今後の課題	21
第5章 終章	22
参考文献	23
資料	27

修士論文要旨

本研究の目的は、中国農村部における留守児童を対象として、映画鑑賞と軽運動という二つの異なる介入が、児童のレジリエンスおよび共感性に及ぼす影響を比較検討することである。近年、中国では急速な都市化と経済発展に伴い、農村地域から都市部への出稼ぎ労働が常態化しており、その結果、親と長期間別居して生活する留守児童が多数存在している。留守児童は、親による日常的な情緒的支援や学習支援を受けにくい生活環境に置かれやすく、先行研究においても、不安感や孤独感の増大、自己肯定感の低下、対人関係上の困難など、さまざまな心理的課題を抱えやすいことが指摘されてきた。こうした背景のもと、留守児童の心理的適応を支える重要な概念としてレジリエンスが注目されている。レジリエンスとは、逆境的な環境に置かれた場合であっても、心理的均衡を保ち、困難を乗り越えながら成長していく力を指す概念であり、児童期の精神的健康や将来的な社会的適応を支える基盤となる。しかし、中国農村部においては、専門的心理支援を継続的に提供する体制が十分に整っているとは言い難く、学校現場において実施可能な、負担の少ない支援方法の検討が求められている。

本研究では、こうした実践的課題に着目し、心理的介入としての映画鑑賞と、身体的介入としての軽運動という、性質の異なる二つの支援方法を比較対象として設定した。映画鑑賞は、物語を通じた感情理解や共感的体験、登場人物の成長過程の追体験を通して、情緒調整能力や自己理解を促進する可能性がある。一方、軽運動は身体活動による気分改善や情緒の安定、集団活動による社会的つながりの形成を通じて、心理的健康を支える効果が期待される。本研究は、これら二つの介入を同一の学校環境において実施し、その効果を実証的に検討する点に特徴を有する。

研究対象は、中国江西省徳安県に位置する農村部小学校の5年生児童80名であり、留守児童および非留守児童の双方を含めて調査を行った。研究参加への同意が得られた児童を、映画鑑賞とディスカッションを行う群、軽運動プログラムを行う群に分け、さらに留守児童・非留守児童の区分を組み合わせた4群構成の研究デザインを採用した。映画鑑賞介入は週1回・全6回実施し、児童向けアニメーション映画を家庭で視聴した後、学校において短時間のグループディスカッションを行った。軽運動介入では、ストレッチや簡単な体操など、低強度の身体活動を集団で実施した。

測定は介入前および介入直後を中心に行い、レジリエンス尺度（CD-RISC）および共感性尺度（IRI-C）を用いた質問紙調査を実施した。分析には反復測定分散分析を用い、介入形式および留守状況による効果の差異を検討した。加えて、自由記述および担任教員による行動観察記録を用い、質的側面からも児童の変化を検討した。

その結果、映画鑑賞介入群および軽運動介入群のいずれにおいても、介入後にレジリエンス得点の有意な向上が認められた。一方で、映画鑑賞介入と軽運動介入の間に統計的に有意な効果差は確認されなかった。また、留守児童と非留守児童の間においても、介入効果の方向性は概ね一致していた。質的分析では、映画鑑賞介入群において、登場人物への感情移入や自己の

気持ちを言語化する記述が多く見られ、共感的理解や内省の深まりが示唆された。

以上の結果から、映画鑑賞および軽運動はいずれも、学校現場において無理なく実施可能であり、児童の心理的安定やレジリエンスの向上を支える有効な支援手法となり得ることが示された。本研究は、農村部における留守児童支援に対して、心理的・身体的双方の観点から実践的示唆を提供する点に意義を有すると考えられる。